大日化成

# ECOへの取り組み

ECOLOGY

大日化成株式会社は、環境に配慮した事業の推進を目指す企業として積極的にエコ活動に取り組み、地球環境の保全と向上に貢献していきます。

今年9月1日に大日化成株式会社の東京営業所から東京支店となり、また手狭になったこともあり少し広い事務所に移転する事にいたしました。

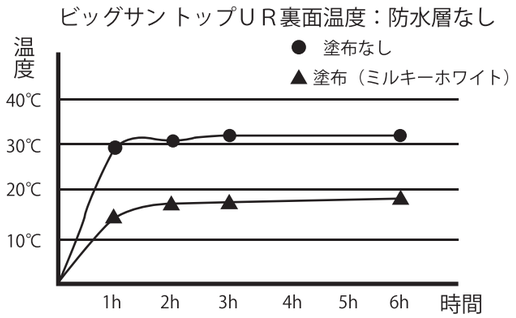
新事務所は、東向きで事務所内の照明が必要無いほど明るく、また窓からは汐留のイタリア街が見える我が社には少し似合わない？お洒落な町並みにあります。

新事務所は、外壁が水垢などで若干汚れていた為、ビルのオーナーに相談し、弊社で外装を塗り替える事となりました。

塗料については、弊社の高反射塗料トップURを使う事にしました。

ご存じの通り高反射塗料とは太陽からのエネルギーを反射させて熱量を軽減し冷房負荷を削減できる。それを屋根や外壁に塗布する事で冷房用のエネルギーを削減できヒートアイランド現象を抑制する効果を増します。

トップURの効果は、試験により何も塗布していない状態より約10℃遮熱効果があることが実証されているので、夏場のエアコンを使用する電気代のランニングコストを押さえる事ができ、CO2排出の抑制ができるので、少なからずとも地球温暖化やエコロジーに貢献できると考えています。




大日新聞に関するお問い合わせ・ご意見などはホームページ及び
大日化成株式会社 06-6909-6755 までお願いいたします。

## スタッフ紹介

日頃は営業活動やお電話で応対させていただいていおりますスタッフの日常をお伝えいたします。

私の住んでいる街「川越」は、一昨年のNHK朝の連続テレビ小説「つばさ」の舞台となってから、年間約630万人（平成21年度）の訪れる観光地まで成長しました。「蔵造り」とよばれる蔵造りの家屋が並ぶ通り（川越一番街商店街）は、蔵造りの外観はビニールテントの看板で覆い隠され、人通りの少ない一見すたれた感じの普通の商店街でした。蔵造りの家屋も劣化と共に取り壊され、現代の建築物が建ち、今ではまったく違った統一感のないのが売りです。

しかし、私が子供の頃は、残り、江戸時代の街並みがそのまま残り、なんとも言えないレトロ感を感じながら散策できるまだそんなに観光客の数は多くありませんでした。（昭和60年：219万人）当時、

そのころになったが、今のような観光地通りだったが、今のような軌跡を調べていくと蔵造りの建物を保存しようという意識が住民の間で高まり1983年『川越蔵の会』（2002年NPO法人化）が発足し、蔵造りの町並み保存するとともに、それを資源とした地域活性化の取り組みが始まりました。

1999年には景観整備のため、商店街が自主的にまちづくりのルールを定め改装をコントロールし、また、行政も支援、広範囲（7.8ha）を文化財保護法による『重要伝統建造物保存地区』に指定。対象となる建築物の維持や、現代風に改装された建築物の復元、補強などに補助一部には耐震補強などに補助金が活用され、建物の保全に合わせ、経済産業省や国土交通省の助成により、電線の地中化、道路の石畳化など景観整備も実施されたのでした。

近接する普通のアーケード商店街だった「銀座通り商店街」も、アーケードを取り払い、大正時代建てられた近代建築の家屋をあらわにさせ、「大正ロマン夢通り」として復活。今や、映画のロケ等に使用されております。

昔の建物が取り壊され、新しい街へと変貌していくのが当たり前な世の中で、このように市民から始まり行政と一体となって、昔のものを残すことで、新しい価値観を生みだすことができるのだ。というのを目の当たりにすると、地元に誇りをおぼえます。

それでも今なお年々、街並みも変貌を遂げて、ついこの間まで住宅街の通りだったところが、趣のある小路になっていたりと、訪れるたびに新たな発見があることに地元の私でも驚いているぐらいです。

私も、仕事において新しい価値を創造できるよう、日々精進して頑張ろうと思います。

東京支店　金井照男


DAINICHI CHEMICAL CO.,LTD.

●本社
〒571-0030　大阪府門真市末広町 8-13
TEL：06-6909-6755(代)　/　FAX：06-6909-6702

●東京支店
〒105-0013　東京都港区浜松町1-2-5
TEL：03-3436-3801(代)　/　FAX：03-3436-3803

次号もお楽しみに

URL：http://www.dainichikasei.co.jp

Vol.11

# 映画で学ぶ環境問題

『グラン・ブルー』（Le Grand Bleu）

監督 リュック・ベッソン
出演者 ロザンナ・アークエット
ジャン＝マルク・バール
ジャン・レノ　他
公開 1988年5月11日
上映時間 120分（編集版）～168分（完全版）
フランス・イタリア合作

「レオン」や「ニキータ」、「フィフス・エレメント」や「TAXi」など、エンターテイメント性溢れる映画づくりで人気の『フランスが生んだ天才映画監督』リュック・ベッソンが初期の1988年に世界的一大ブームを巻き起こした海洋映画です。

主人公ジャック・マイヨールとライバルであるエンゾは実在のダイバー。彼らは「フリーダイブ」と呼ばれる素潜りの部門で深海100m超えの記録を本当に樹立しています。ただ、実際の彼らの人生や人間性は映画と異なっており、映画内で死亡したエンゾの方は今も健在で、反対に、日本でも人気者だったジャック・マイヨールの方は2001年に首つり自殺という残念な最期を遂げています。

さて映画のストーリーは、幼少時から幼なじみとして過ごしたフランス人ジャックとイタリア人エンゾの「素潜り」にかける情熱を描いており、海とイルカをこよなく愛するジャックと、彼を愛するがため、苦悩するアメリカ人女性との恋愛もからめた物語です。ロマンチックすぎるシーンがあるためお子様と一緒には見づらいのと、内容的に環境の大切さを訴えたものではないので「環境映画とは呼びたくない」作品かもしれません。

にも関わらずこのコーナーで取り上げたのは、この作品全体を通して「海への深い愛」を感じたからです。実在のジャック自身も、「イルカ人間」と呼ばれる程の人で、「イルカと人間が共存すべきだ」ということと「人類は、いつか海に還る。」ということを訴え続けたそうです。そんなジャックは、今なお多くのダイバーに影響を与えカリスマ的に愛されており、彼の想いは後進ダイバー達に「海を汚すな！」と受け継がれています。

ちなみに、実在のジャックが海に潜ることを覚えたのは6歳の時。そして10歳の時にイルカと出会いますが、ナント！どちらも、日本の佐賀県唐津での体験です。当時、彼の一家はよく日本と上海を行き来していたようで、それを知ればますます、「日本の海を汚さず、大切にしなければならない！」「イルカがのんびり散歩できる海にしなければならない！」そんな風に思えてしまいます。

そして映画の中のジャックは、実はリュック・ベッソンという人物の歴史が投影されているのではないか、と思えてきます。現にリュックこそ、両親がスキューバダイビングのインストラクターだったことから、この映画の舞台である地中海沿岸で子供時代を過ごしていましたし、将来はイルカを専門とする海洋生物学者になる夢を抱いていたものの、17歳の時に潜水事故が原因でダイビングが出来なくなり、その夢を断念して映像の世界に入ってきたということです。そういう監督のバックボーンがあったからこそジャック・マイヨールと出会ってすぐに意気投合し、この映画を作り、熱い想いゆえに大ヒットさせることができたのでしょう。

ただ作風としては、フランス映画界でも一番ハリウッドっぽいリュック・ベッソンにしては、やや冗長気味と感じました。「まだリュックのフランス人さが抜けきれていず、フランス映画として見た方が理解しやすい時代の作品」と言えば良いのでしょうか・・・。

個人的には、エンゾを演じたジャン・レノが秀逸だったのと、「イルカの散歩」シーンが美しかった点が、お薦めポイントです。